

■研究報告

包括システムにおける LAMBDA の影響力

The impact of LAMBDA in the Comprehensive System

小西宏幸 (関西大学社会学研究科)

Hiroyuki Konishi (Major of Social Psychology, Kansai University)

要 旨

本研究の目的は、ラムダ (L) がロールシャッハ諸変数における、どのような構造データに影響を及ぼすかを検討することである。20歳以上の非患者成人170名 (男性75名・女性95名) を対象に包括システムによるロールシャッハ・テストを個人法によって実施した。得られた資料を基に、四分位偏差に準拠して、Lの高い群と低い群を決定した。Lが高い群における被検者は男性28名・女性18名であり、一方、低い群は男性12名・女性32名であった。そして、この2群間における主要変数の統計値を比較した。次のような結果が得られた。2群間に有意差は認められなかったのはR、形態水準、Afrなどであった。これらの変数は、Lの影響力はそれほど強くないと思われる。したがって、それらは、Lの値にかかわらず、一定の基準値によって解釈できるかもしれない。対照的に、ほとんどの決定因子において、2群間で有意差が認められた。例として、Lの高い群は低い群よりも、Fが多く、また、Lの低い群では、運動反応や色彩反応などのような決定因子が、より多く出現した。これらの変数に関して、解釈する者は、諸要因の1つとしてLの影響力を考慮すべきと考えられる。さらに、日本人被検者におけるLの高い傾向が体験型や特殊指標に及ぼす影響についても考察した。

Abstract

The purpose of this study is to explore what kinds of structural data in Rorschach variables the LAMBDA (L) has an effect on. An individual Rorschach test based on the Comprehensive System was administrated to 170 nonpatient adults (75 males, 95 females ; over 20 years old). Based on the data obtained from the method, a high group and a low group in L were defined in accordance with the quartile deviation. The high group consisted of 28 male and 18 female subjects, whereas the low group consisted of 12 male and 32 female subjects. Subsequently, statistical data of major variables between the two groups were compared. The following results were found. There was no significant difference in R, form quality, Afr and so on between the two groups. These variables don't seem to have that much impact from L. Therefore, they may be interpreted based on certain criteria regardless of the value of L. In contract, there were significant differences in most of determinants between the two groups. For instance, the high group tended to have more F than the low group, while determinants such as movement response, color response and so on tended to appear more in the low group. As for these variables, it is considered that interpreters should consider the impact of L as one of various factors. In addition, the tendency of L appearing high in Japanese subjects was inspected in terms of its effect on EB style and Special Index.

キー・ワード：ラムダ，包括システム，ロールシャッハ・テスト

Key Words : LAMBDA, comprehensive system, Rorschach Test

I. はじめに

包括システムの変数において、LAMBDA (以下、Lとする)は、従来のロールシャッハ・テストの手法ではF%に相当するものであり、最も重要な構造データの1つである。この指標は、(1)式によって算出される。

$$L = F / R - F \dots\dots\dots(1)$$

すなわち、総反応数(R)に対して、決定因子がPure Fのみから成立している反応総数の占める割合が半数であれば、Lの値は1.00になる。Exner, J.E. は、このLが1.00以上の場合、ハイラムダ・スタイルと表現し、Lが高い被検者としている。そして、このハイラムダ・スタイルという傾向は、包括システムにおいては、体験型以上にパーソナリティに影響の大きな反応スタイルと見なされる。鍵変数として、ハイラムダ・スタイルに1つの解釈順序が付与されているのも、このためである。

ところで、Exner (1990, 1991) は、Lが高くなるにつれて、EAやes (特にFM) などが低くなるというように、他のロールシャッハ諸変数がLの影響を受けることを指摘した。また小西(1996)は、日本人被検者を対象に、包括システムにおけるロールシャッハ諸変数の相互関係を調査した結果、Lと有意で-.50よりも強い逆相関を示した変数にはDQ+やEA, es, active, Blendsがあり、Lと有意で.40以上の相関を示した変数にはDQ₀があったという。しかし、Lの影響力を検討するには、このような相関研究だけでなく、さまざまな研究方法による検証が重要であろう。

本研究の目的は、Lが強く影響する変数とそうでない変数を明らかにし、構造データをより有効に解釈できるようにすることである。その際、既述のように、相関研究によるLの影響力の検討を補うために、研究デザインとして比較研究を用いた検証を行いたい。

II. 方法

1. 被検者

被検者は20～69歳までの非患者成人で男性75名、女性95名の計170名である。被検者群

の平均年齢は31.5歳(標準偏差12.3)である。

2. 手続き

すべての被検者に対して、同一の検査者が個人法によってロールシャッハ・テストを施行した。検査の実施法とコード化は、Exnerの包括システムを日本人被検者に適用した高橋・西尾(1994)の基準に準拠した。また、コード化は包括システムに習熟した3名以上の者の合議により決定した。

3. 結果の処理

まずLの詳細な記述的統計を算出し、四分位偏差の数値に準拠し、25パーセンタイル値までをLの値の低い被検者群(以下、低群とする)、75パーセンタイル値からをLの値の高い被検者群(以下、高群とする)として抽出した。次に、包括システムの主要な構造データについて、Wilcoxonの順位和検定によって両群間の比較検討を行った。

III. 結果

表1にLの記述的統計を示す。この表に示したとおり、Lの25パーセンタイル値は0.55、75パーセンタイル値は1.38であった。したがって、 $0.15 \leq L \leq 0.55$ の被検者を低群、 $1.38 \leq L \leq 5.25$ の被検者を高群に分類した。その結果、低群のサンプル数は44名、高群のサンプル数は46名となった。従来の研究では、日本人被検者のLは、Exnerの示す基準よりも高くなる傾向が指摘されているが(例えば、高橋・西尾, 1994; 佐藤・寺村・中村・藤岡ら, 1998など)、今回の資料でも同様の傾向が認められた。

また、表2に高群と低群の年齢の分布、表3に両群の性別の分布、それぞれ示す。

これらの表に示したように、高群が低群よりも年齢が低く、男性が多かった。

表4は両群の体験型の分布である。

この表に示したとおり、体験型の該当頻度に関しては、両群間に大きな差は認められなかった。Exner (1995)は、複数の被検者群の比較検討の際、差異が生じる一因として、この体験型を重視しているが、本研究での群間比較の際に、体験型の差異が反映している可能性は低いと思

表1 Lの記述的統計 (N=170)

Mean	SD	Max	Min	Range	Median	Q3	Q1	Mode	SK	KU
1.04	0.74	5.25	0.15	5.10	0.825	1.38	0.55	0.73	2.22	8.01

表2 年齢の分布

Group	Mean	SD	Max	Min	Range	Median	Q3	Q1	Mode	SK	KU
高群	26.71	9.89	67	20	47	22.0	27.0	22	22	2.34	5.68
低群	35.54	13.46	69	20	49	34.5	44.5	22	21	0.62	-0.48

表3 性別の分布

性別	男性	女性	計
高群	28	18	46
低群	12	32	44

表4 体験型の分布

体験型	Intro.	Extra.	Ambit.	計
高群	12	6	28	46
低群	15	8	21	44

注) Intro.: 内向型 Extra.: 外拡型
Ambit.: 両向型

われる。

表5に、両群の主要変数の記述的統計と検定結果を示す。

この表に示したように、高群において、より高い統計値を示した変数には、DやDd, DQo, Ad, Hdなどがあった。一方、低群において、より高い統計値を示した変数には、EAやes, W, DQ+, Blends, Zf, 孤立指標, Sum 6, Wsum 6などがあった。

それに対して、両群間に有意差の認められなかった変数には、RやDQv, 形態水準のコード(X+%, F+%, Xu%, X-%, S-%), ペア反応, A, P(平凡反応), 知性化指標, Afr, MORなどがあった。

IV. 考察

有意差の認められた変数群を検討すると、領域では、すべてのシンボルに差が認められ、決定因子においても、ほとんどのシンボルに差が認められた。なお、決定因子のシンボルの1つであるSumVの両群の差は、傾向水準にとどまっていた(p<.0883)。

まず、領域については、高群におけるDや

Dd, Sの多さと低群におけるWの多さが認められた。つまり、Lが高くなると、プロット領域を任意に区切って知覚する反応様式が優位になるといえよう。これは、DQ+やZf, Blendsといった変数において、高群が低群よりも低い数値になっていることにもいえることだが、Lの高い被検者が、あまり複雑な課題解決を行っていないことによるものと考えられる。

また、高群において出現頻度が低く、中央値と最頻値が0である変数には、MaやSumT, SumY, FD, COPがあった。これらの変数に関しては、解釈の際、プロトコルに出現しないことについては、さまざまな要因を考慮すべきと考えられるが、その諸要因の1つにLがあげられる。特に、SumT, FD, COPなどの変数は、日本人被検者の準拠資料においても、最頻値が0となる傾向にある。つまり、これらの変数がプロトコルに出現しない場合、その被検者のLが高いためであるという可能性も考えられる。

一般に、ある変数が出現しないことに対しては、いくつかの解釈仮説が考えられる。その1つは、解釈的に有意ではないというものであり、

表5 両群の主要変数の記述的統計 {上段：高群 (N=46) /下段：低群 (N=44)}

変数	Mean(SD)	Max	Min	Median	Mode	FREQ	+SK	+KU	#Prob.
R	21.17(4.97)	37.00	14.00	19.00	19.00	46	1.49	2.33	
	20.00(5.28)	37.00	14.00	19.00	20.00	44	1.51	2.18	
W	8.58(3.52)	17.00	3.00	7.50	5.00	46	.61	-.48	* *
	11.09(3.95)	25.00	5.00	10.50	10.00	44	1.19	2.31	
D	9.69(5.06)	23.00	2.00	9.50	4.00	46	.76	.35	*
	7.29(3.58)	18.00	0.00	6.50	6.00	43	.64	.67	
Dd	2.89(1.90)	11.00	0.00	3.00	2.00	45	2.17	7.14	***
	1.61(1.49)	6.00	0.00	1.00	1.00	33	1.18	1.58	
S	2.89(1.98)	8.00	0.00	3.00	2.00	39	.40	-.02	*
	1.95(1.55)	5.00	0.00	1.00	1.00	37	.54	-.92	
DQ+	3.08(1.95)	10.00	0.00	3.00	2.00	44	1.03	2.11	***
	6.47(3.48)	17.00	1.00	6.00	6.00	44	1.04	1.37	
DQo	16.78(4.59)	32.00	10.00	15.50	15.00	46	1.19	1.90	***
	12.06(3.47)	23.00	6.00	12.00	9.00	44	.96	1.30	
DQv	1.04(1.17)	4.00	0.00	1.00	0.00	26	.86	-.43	
	1.20(1.11)	4.00	0.00	1.00	0.00	28	.42	-.73	
DQv/+	0.26(0.57)	2.00	0.00	0.00	0.00	9	2.14	3.62	
	0.25(0.43)	1.00	0.00	0.00	0.00	11	1.19	-.59	
Fnone	0.02(0.14)	1.00	0.00	0.00	0.00	1	6.78	46.00	
	0.04(0.21)	1.00	0.00	0.00	0.00	2	4.51	19.30	
M-	0.04(0.20)	1.00	0.00	0.00	0.00	2	4.62	20.31	
	0.15(0.36)	1.00	0.00	0.00	0.00	7	1.93	1.80	
Mnone	0.00(0.00)	0.00	0.00	0.00	0.00	0	—	—	
	0.04(0.21)	1.00	0.00	0.00	0.00	2	4.51	19.30	
M	2.06(1.45)	6.00	0.00	2.00	2.00	40	.56	-.11	***
	4.29(3.09)	14.00	0.00	3.50	3.00	43	1.50	2.76	
FM	1.93(1.42)	5.00	0.00	2.00	1.00	37	.16	-1.05	***
	4.56(2.17)	11.00	1.00	4.00	3.00	44	.74	.62	
m	0.50(0.78)	3.00	0.00	0.00	0.00	16	1.45	1.33	* *
	1.18(1.20)	5.00	0.00	1.00	1.00	30	1.30	1.72	
FM+m	2.43(1.68)	7.00	0.00	2.00	1.00	41	.55	-.06	***
	5.75(2.34)	11.00	2.00	5.00	5.00	44	.48	-.36	
FC	1.10(1.03)	4.00	0.00	1.00	0.00	29	.52	-.35	* *
	2.18(2.01)	10.00	0.00	2.00	0.00	33	1.41	3.76	
CF	0.93(0.97)	3.00	0.00	1.00	0.00	27	.73	-.47	* *
	1.94(1.38)	6.00	0.00	2.00	1.00	40	.99	.89	
C	0.02(0.14)	1.00	0.00	0.00	0.00	1	6.78	46.00	
	0.11(0.38)	2.00	0.00	0.00	0.00	4	3.68	14.13	
Cn	0.00(0.00)	0.00	0.00	0.00	0.00	0	—	—	
	0.00(0.00)	0.00	0.00	0.00	0.00	0	—	—	
ALL C	2.06(1.21)	5.00	0.00	2.00	2.00	41	.17	-.28	***
	4.23(2.77)	15.00	0.00	4.00	3.00	43	1.56	4.38	
WSumC	1.52(0.96)	3.50	0.00	1.50	1.00	46	.28	-.79	***
	3.20(2.04)	10.00	0.00	3.00	2.00	44	1.25	2.23	
SumC'	1.00(1.21)	5.00	0.00	1.00	0.00	27	1.56	2.38	* *
	1.93(1.68)	8.00	0.00	2.00	1.00	35	1.23	2.46	

表5 両群の主要変数の記述的統計 (つづき)

変数	Mean(SD)	Max	Min	Median	Mode	FREQ	+SK	+KU	#Prob.
SumT	0.15(0.36)	1.00	0.00	0.00	0.00	7	2.00	2.09	* *
	0.68(0.82)	3.00	0.00	0.00	0.00	21	.92	-.09	
SumV	0.13(0.34)	1.00	0.00	0.00	0.00	6	2.26	3.29	
	0.29(0.50)	2.00	0.00	0.00	0.00	12	1.46	1.30	
SumY	0.32(0.59)	2.00	0.00	0.00	0.00	12	1.69	1.90	*
	0.68(0.77)	3.00	0.00	1.00	0.00	23	.94	.46	
SumSH	1.60(1.42)	6.00	0.00	1.00	1.00	38	1.41	2.30	***
	3.59(2.29)	11.00	0.00	3.00	3.00	43	1.15	2.12	
Fr+rF	0.08(0.46)	3.00	0.00	0.00	0.00	2	5.95	36.91	*
	0.29(0.63)	3.00	0.00	0.00	0.00	10	2.57	7.55	
FD	0.36(0.57)	2.00	0.00	0.00	0.00	15	1.28	.76	*
	0.84(0.93)	3.00	0.00	1.00	0.00	23	.68	-.74	
F	13.82(4.25)	28.00	9.00	12.50	11.00	46	1.86	3.84	***
	5.43(1.94)	11.00	3.00	5.00	4.00	44	1.00	.63	
(2)	5.69(3.58)	19.00	0.00	5.00	4.00	45	1.16	2.69	
	6.06(3.10)	13.00	1.00	6.00	4.00	44	.25	-.45	
3r+(2)/R	0.27(0.14)	0.58	0.00	0.26	0.17	46	.08	-.71	
	0.33(0.14)	0.67	0.05	0.35	0.27	44	-.09	-.05	
LAMBDA	1.96(0.78)	5.25	1.38	1.75	1.38	46	2.60	7.45	***
	0.37(0.10)	0.55	0.15	0.38	0.33	44	-.20	-.38	
EA	3.58(1.41)	7.00	1.00	3.50	3.00	46	.36	-.41	***
	7.50(4.23)	24.00	2.00	6.75	5.00	44	1.93	5.21	
es	4.04(1.98)	8.00	1.00	4.00	3.00	46	.38	-.48	***
	9.34(3.60)	19.00	3.00	9.00	7.00	44	.59	.09	
DScore	-0.08(0.69)	1.00	-2.00	0.00	0.00	46	-.71	1.33	
	-0.52(1.84)	5.00	-5.00	0.00	0.00	44	0.06	1.68	
Adj D	-0.06(0.64)	1.00	-2.00	0.00	0.00	46	-.45	1.02	
	-0.31(1.82)	5.00	-5.00	0.00	0.00	44	0.23	1.39	
active	2.06(1.78)	6.00	0.00	2.00	0.00	34	.46	-.78	***
	6.52(2.73)	13.00	2.00	7.00	7.00	44	.42	-.41	
passive	2.43(1.52)	6.00	0.00	2.00	1.00	45	.81	.03	*
	3.59(2.27)	11.00	0.00	3.00	2.00	43	.95	1.12	
Ma	0.78(1.03)	4.00	0.00	0.00	0.00	22	1.34	1.27	***
	2.72(2.06)	9.00	0.00	2.00	2.00	38	.78	.51	
Mp	1.28(1.00)	3.00	0.00	1.00	2.00	33	.08	-1.13	
	1.56(1.75)	8.00	0.00	1.00	1.00	34	2.37	6.78	
Intelle.	0.71(0.88)	3.00	0.00	0.00	0.00	46	.80	-.70	
	1.13(1.54)	7.00	0.00	1.00	0.00	44	2.12	5.41	
Zf	10.95(3.61)	20.00	3.00	11.00	11.00	46	.35	.03	* *
	14.02(4.74)	31.00	7.00	13.00	11.00	44	1.65	3.54	
Zd	-1.45(3.98)	7.00	-12.00	-1.50	-1.50	46	-.13	-.00	
	-1.59(5.16)	17.00	-10.00	-1.25	-4.50	44	.99	2.48	
Blends	1.19(1.18)	4.00	0.00	1.00	1.00	31	.94	.15	***
	3.79(2.53)	12.00	1.00	3.00	3.00	44	1.25	1.65	
CSB	0.21(0.46)	2.00	0.00	0.00	0.00	9	2.07	3.80	* *
	0.56(0.87)	4.00	0.00	0.00	0.00	17	1.86	4.26	

表5 両群の主要変数の記述的統計 (つづき)

変数	Mean(SD)	Max	Min	Median	Mode	FREQ	+SK	+KU	#Prob.
Afr	0.44(0.15)	0.92	0.27	0.41	0.38	46	1.57	2.89	
	0.46(0.13)	0.70	0.20	0.43	0.36	44	.03	-.82	
Popular	5.00(1.31)	8.00	2.00	5.00	5.00	46	.12	.08	
	5.27(1.85)	11.00	2.00	5.00	4.00	44	.94	1.08	
Common	0.58(0.65)	2.00	0.00	0.50	0.00	23	.66	-.51	
	0.84(0.77)	2.00	0.00	1.00	0.00	27	.28	-1.26	
X+%	0.69(0.11)	1.00	0.43	0.695	0.63	46	.22	.48	
	0.72(0.12)	0.94	0.44	0.74	0.75	44	-.48	.24	
F+%	0.67(0.14)	1.00	0.43	0.69	0.75	46	.08	-.52	
	0.70(0.19)	1.00	0.00	0.75	0.75	44	-1.12	2.57	
Xu%	0.22(0.10)	0.49	0.00	0.21	0.16	46	.25	-.46	
	0.19(0.09)	0.39	0.00	0.215	0.13	44	-.21	-.65	
X-%	0.08(0.06)	0.27	0.00	0.08	0.00	46	.84	.72	
	0.07(0.06)	0.33	0.00	0.06	0.00	44	1.71	5.18	
S-%	0.15(0.29)	1.00	0.00	0.00	0.00	46	1.80	2.36	
	0.12(0.28)	1.00	0.00	0.00	0.00	44	2.30	4.54	
Isolate	0.11(0.07)	0.28	0.00	0.11	0.00	46	.49	-.52	* *
	0.17(0.09)	0.40	0.00	0.17	0.13	44	.36	-.12	
H	2.00(1.19)	5.00	0.00	2.00	2.00	42	.41	-.14	*
	3.11(2.40)	11.00	0.00	3.00	3.00	41	1.51	2.77	
(H)	0.54(0.65)	2.00	0.00	0.00	0.00	21	.81	-.35	
	0.88(1.01)	3.00	0.00	1.00	0.00	23	.79	-.58	
Hd	1.45(1.47)	7.00	0.00	1.00	0.00	32	1.42	3.08	*
	0.81(0.92)	4.00	0.00	1.00	0.00	25	1.31	2.16	
(Hd)	0.67(0.84)	3.00	0.00	0.00	0.00	21	.92	-.25	
	0.47(0.82)	3.00	0.00	0.00	0.00	14	1.79	2.62	
ALL H	4.67(2.50)	13.00	1.00	4.00	4.00	46	1.23	2.18	
	5.29(3.55)	20.00	0.00	5.00	4.00	43	2.15	6.60	
A	7.56(3.39)	18.00	2.00	7.00	7.00	46	.64	.38	
	6.88(2.45)	14.00	2.00	7.00	6.00	44	.58	1.08	
(A)	0.47(0.72)	3.00	0.00	0.00	0.00	17	1.55	2.29	
	0.81(0.89)	2.00	0.00	0.50	0.00	22	.37	-1.68	
Ad	3.06(1.54)	6.00	0.00	3.00	2.00	44	.03	-.58	* *
	2.25(1.51)	7.00	0.00	2.00	1.00	21	1.07	1.11	
(Ad)	0.26(0.49)	2.00	0.00	0.00	0.00	11	1.69	2.14	
ALL ()	0.34(0.60)	2.00	0.00	0.00	0.00	12	1.62	1.64	
	1.95(1.38)	5.00	0.00	2.00	1.00	39	.39	-.55	
	2.52(1.89)	7.00	0.00	2.00	2.00	39	.77	-.09	
An	0.45(0.78)	4.00	0.00	0.00	0.00	16	2.49	8.52	
	0.38(0.75)	4.00	0.00	0.00	0.00	13	2.96	11.65	
Ay	0.21(0.46)	2.00	0.00	0.00	0.00	9	2.07	3.80	* *
	0.02(0.15)	1.00	0.00	0.00	0.00	1	6.63	44.00	
Art	0.45(0.65)	2.00	0.00	0.00	0.00	17	1.15	.21	
	0.75(0.99)	4.00	0.00	0.00	0.00	20	1.28	1.33	
Bt	1.15(1.17)	4.00	0.00	1.00	1.00	31	1.07	.44	* *
	2.00(1.59)	6.00	0.00	2.00	1.00	37	.85	.26	

表5 両群の主要変数の記述的統計 (つづき)

変数	Mean(SD)	Max	Min	Median	Mode	FREQ	+SK	+KU	#Prob.
Cg	1.13(1.20)	5.00	0.00	1.00	0.00	29	1.25	1.69	
	1.86(2.02)	9.00	0.00	1.00	1.00	34	1.90	4.01	
Cl	0.06(0.24)	1.00	0.00	0.00	0.00	3	3.64	11.77	
	0.09(0.36)	2.00	0.00	0.00	0.00	3	4.32	19.58	
Fd	0.52(0.93)	4.00	0.00	0.00	0.00	14	1.96	3.74	
	0.43(0.75)	3.00	0.00	0.00	0.00	13	1.74	2.37	
GE	0.15(0.55)	3.00	0.00	0.00	0.00	4	4.10	17.57	
	0.02(0.15)	1.00	0.00	0.00	0.00	1	6.63	44.00	
Ls	0.50(0.83)	4.00	0.00	0.00	0.00	16	2.14	5.74	
	0.68(0.73)	2.00	0.00	1.00	0.00	23	0.59	-.91	
Mask	0.21(0.46)	2.00	0.00	0.00	0.00	9	2.07	3.80	
	0.25(0.48)	2.00	0.00	0.00	0.00	10	1.80	2.59	
Mu	0.39(0.53)	2.00	0.00	0.00	0.00	17	.90	-.27	
	0.29(0.55)	2.00	0.00	0.00	0.00	11	1.75	2.30	
Na	0.17(0.43)	2.00	0.00	0.00	0.00	7	2.57	6.46	
	0.25(0.48)	2.00	0.00	0.00	0.00	10	1.80	2.59	
Xy	0.06(0.24)	1.00	0.00	0.00	0.00	3	3.64	11.77	
	0.13(0.40)	2.00	0.00	0.00	0.00	5	3.19	10.48	
Sum6SpSc	0.76(0.89)	4.00	0.00	1.00	0.00	25	1.46	2.77	* *
	1.40(1.31)	6.00	0.00	1.00	1.00	33	1.29	2.20	
SpSc L2	0.02(0.14)	1.00	0.00	0.00	0.00	1	6.78	46.00	
	0.04(0.21)	1.00	0.00	0.00	0.00	2	4.51	19.30	
WSum6	1.34(2.00)	8.00	0.00	1.00	0.00	46	2.01	3.66	* *
	3.40(3.42)	14.00	0.00	3.00	0.00	44	1.45	2.09	
AB	0.02(0.14)	1.00	0.00	0.00	0.00	1	6.78	46.00	
	0.18(0.65)	3.00	0.00	0.00	0.00	4	3.92	15.04	
AG	0.08(0.28)	1.00	0.00	0.00	0.00	4	3.03	7.51	* *
	0.38(0.53)	2.00	0.00	0.00	0.00	16	.94	-.17	
CONFAB	0.00(0.00)	0.00	0.00	0.00	0.00	0	—	—	
	0.00(0.00)	0.00	0.00	0.00	0.00	0	—	—	
COP	0.36(0.53)	2.00	0.00	0.00	0.00	16	1.01	-.03	* *
	1.45(1.40)	5.00	0.00	1.00	0.00	29	0.70	-.35	
CP	0.00(0.00)	0.00	0.00	0.00	0.00	0	—	—	
	0.00(0.00)	0.00	0.00	0.00	0.00	0	—	—	
MOR	0.41(0.71)	3.00	0.00	0.00	0.00	14	1.83	3.11	
	0.45(0.66)	2.00	0.00	0.00	0.00	16	1.17	.24	
PER	0.34(0.60)	2.00	0.00	0.00	0.00	13	1.56	1.48	
	0.54(0.87)	3.00	0.00	0.00	0.00	15	1.49	1.24	
PSV	0.21(0.55)	3.00	0.00	0.00	0.00	8	3.34	13.64	
	0.18(0.39)	1.00	0.00	0.00	0.00	4	1.70	0.96	

注) # Wilcoxon's rank sum test * : p<.05 * * : p<.01 * * * : p<.001

¹⁾ ALL () = (H)+(Hd)+(A)+(Ad)

+SASの定義ではSK = 0, KU = 0の時が正規分布.

これは特に1つでも出現すれば問題視される変数に顕著である(例えば、M-やLEVEL2の特殊スコアなど)。これに対して、ある変数が出現しなかったのは(あるいは極めて低い数値であるのは)、その被検者のある特徴が低い・小さい・弱いと解釈される場合があるだろう。しかし、このような特徴の低さと解釈し得る場合と同時に、単に心理検査において表出されなかっただけであるという可能性も考慮すべきであろう。

Lという変数には、被検者のパーソナリティ特徴を反映する要素の他に、検査場面に対する被検者の態度を反映する要素も包含されている。包括システムでは、Lの高さについて、課題解決の経済性という被検者のパーソナリティ特徴と被検者の検査に対する防衛的態度という2つの大きな解釈仮説が提示されている。しかしながら、Exner (1993) は、残念ながら、この両者を確実に判別する方法はないとも示唆している。特に、積極的に検査に取り組んでないと思われる被検者の場合、Lの高さが状況要因を反映している可能性を考慮することは重要である。この問題は、人間行動の背後要因をよりパーソナリティに帰属するか、状況に帰属するかという性格心理学や社会心理学の主要な研究アプローチやテーマにも関連しているであろう。

ここで、ハイラムダ・スタイルにおける解釈仮説の1つである「課題解決の経済性」に着眼したい。これを被検者のパーソナリティ特性として考える場合、外界刺激を単純化する傾向と表現できる。包括システムの解釈においては、この特徴はそれほど被検者の長所としては見なされない。しかし、Lが高いことを「効率がいい」・「要領のよさ」としてとらえることも可能であろう。特に、高群が低群よりもSum6SpScとWSum 6の数値が低いことから「言語表現が豊かとはいえないものの、余計なことには言及しない」と肯定的に解釈することも可能と思われる。

次に、低群は高群よりも、Fr+rFの出現頻度が有意に高い($p < .02$)が、この結果は自己中心

性指標における両群の差異にも影響を及ぼしているといえよう。ただし、ペア反応に関しては、両群に有意差は認められず($p < .46$)、自己中心性指標に関する両群の差異の水準はMcguire and Exner (1995) の論点を待つまでもなく、群間の差異を主張する根拠としては強いものではない($p < .0427$)。

一方、群間に有意差が認められなかった変数は、Lの値にかかわらず、ある一定の基準により解釈できると考えられる。

ところで、Lを算出するうえで、最も重要な決定因子は、形態反応(F)であるが、形態反応が生じた場合、必ずコード化されるのが形態水準である。この形態水準とLの高低の関係について考察したい。Exner (1993) は、 $L \geq 1.00$ の被検者が全体の5%である700名の非患者成人の準拠サンプルと、 $L \geq 1.00$ ばかりで構成される114名の非患者成人の被検者群をいくつかの変数で比較している。これによると、形態水準において、X+%に関しては700名の準拠サンプルの平均が0.79であったのに対して114名のハイラムダ・スタイル被検者群の平均が0.74であった。また、Xu%に関しては700名の準拠サンプルの平均が0.14であったのに対して114名のハイラムダ・スタイル被検者群の平均が0.18であった。さらに、X-%に関しては700名の準拠サンプルの平均が0.07であったのに対して114名のハイラムダ・スタイル被検者群の平均が0.08であった。つまり、ハイラムダ・スタイルの被検者群において、わずかではあるがX+%の値が低くなっており、Xu%とX-%の値が高くなっている。今回の資料でも、これらの形態水準の諸変数については、有意差は認められないものの、高群が低群よりも、X+%が低く、Xu%とX-%が高く、同様の傾向が認められた。Exnerは、形態水準について、ハイラムダ・スタイルの被検者とそうでない被検者との間には大きな差はないという見解を示しているが、Lが高くなると、形態水準がuや-の反応が、わずかに増加するのかもしれない。これに関係するが、既述の反応領域に関する変数で、高群においてSやDdの出現頻度が高いという

結果も、主観的な知覚様式という観点から考えることができるかもしれない。

以上、Lの高低と他のロールシャッハ諸変数との関係について検討してきたが、次に、これらの諸変数が構成要素となる指標をいくつか検討したい。なお、本研究における群間比較のアナロジーは、日米の被検者の差異についても適用可能と思われる。というのも、Lの高低という観点からも日本人被検者の反応特徴とExnerの示す基準との差異を考察することが可能と思われる。したがって、本研究における高群と低群の群間比較によって得られた知見から、日米の被検者の比較検討にも問題を展開していきたい。

Exner (1995) は、ハイラムダ・スタイルの被検者は、 $L \leq .99$ の被検者よりも、CDIに該当しやすく、ブレンド反応やPureHが少なく、SumTが0のプロトコルになる傾向があると指摘している。既述のように、日本人被検者はLが高い傾向にあり、 $L \geq 1.00$ に該当する被検者は少ない。Lの記述的統計において、平均値が1.00に近いという事実もある。したがって、Exnerの準拠資料よりも、日本人被検者がCDIに該当しやすく、ブレンド反応やPureH、SumTなどの統計値が低くなることが予想されるし、実際に高橋・西尾(1994)や佐藤・寺村・中村・藤岡ら(1998)の資料では、その傾向が認められる。本研究の資料でも、ブレンド反応やPureH、SumTなどの変数において、高群が低群よりも低い統計値になっていた。また、CDIを構成する変数において、その数値が低くなることによって、下位条件を満たすものに、EA、AdjD、COP、AG、WsumC、PureH、SumTがあるが、AdjDを除いて、これらすべての変数は、高群が低群よりも有意に低い数値を示している。これらの結果からも、Lが高くなるとCDIに該当しやすいたことが示されている。したがって、日本人被検者の場合、CDIに該当しても、必ずしも被検者の否定的側面を示しているとは限らないと思われる。

次に、Lが高くなるとEAが低くなる傾向があるという点について考察したい。EAは体験

型を決定する重要な変数といえる。EAが低いと、EBの両辺の値も低くなる。その結果、両辺の数値の差が小さくなり、左辺と右辺のいずれか一方が優位になりにくくなる。Exnerは、体験型が内向型か外拡型に該当する条件として、 $EA \leq 10.0$ の場合、両辺の差が少なくとも2以上、 $EA > 10.0$ の場合、両辺には少なくとも2.5以上の差が必要であると述べている。つまり、EAが低ければ、体験型としては、外拡型や内向型よりも両向型が成立しやすい。これに関連するが、EAについてはExnerの示している基準よりも日本人被検者の統計値が低くなる傾向にある。そして、日本人被検者の体験型には、両向型が最も多い(高橋・西尾, 1996)。また、この両向型についても、Exnerは、両向型を下位分類していないが、高橋・西尾(1996)や高橋・高橋・西尾(1998)は、EAの値が低い場合の両向型を収縮両向型と表現している。

以上、LのとCDI、体験型の関係について個別に検討してきたが、Exner(1993)の著書には、非患者成人を体験型ごとに分類した構造データが記載されている。それによると、体験型とCDIの該当頻度には興味深い関係がある。内向型でCDIに該当する被検者は皆無であり、外拡型では306名中8名(3%)、両向型では143名中12名(8%)である。つまり、両向型においてCDIに該当する頻度が最も高い。今回の資料では、高群においてCDIに該当する被検者は46名中28名(60.8%)であり、そのうち、6名が内向型、2名が外拡型、20名が両向型であった。それに対して、低群においてCDIに該当する被検者は44名中8名(18.2%)であり、そのうち、1名が内向型、2名が外拡型、5名が両向型であった。両群とも、両向型の被検者にCDI該当が最も多く、しかも、全体として高群における該当頻度の高さが顕著であった。

包括システムの解釈過程(Exner, 1991; 藤岡・中村・佐藤・木村, 1995)では、CDIはストレスや対人関係の問題として、両向型は対処様式の非効率性・非一貫性として、被検者の否定的側面として解釈される。しかし、これらの指標に日本人被検者が該当しやすい背景を単にL

の高さに帰属することも可能である。CDIに該当する被検者はLの高さと両向型という2つの条件を満たす傾向にあると思われる。つまり、Lの高さがEAを低くし、同時に、EBの両辺の格差が顕著でなくなり、両向型(特に収縮両向型)に該当しやすくなる²⁾。その結果、CDIにも該当する確率が高くなる。このような説明も日本人被検者における包括システムの構造データの特徴としては成り立つかもしれない³⁾。

このように、Exnerの示す基準よりも日本人被検者のLの値が高いことによって、包括システムの解釈過程において、Exnerが記述しているさまざまな構造データの基準値と解釈仮説の適用に検討課題が生じるように思える。高橋・高橋・西尾(1998)は、日本人被検者におけるLの平均域が0.42~1.18の範囲であることを記述しているが、日本人被検者にとってのハイラムダ・スタイルを定義することは、今後の大きな検討課題であろう⁴⁾。

最後に、今回の資料では、Lの高い被検者に男性が多く、両群間に年齢差があることから、ロールシャッハ変数に対するLの影響力をさらに厳密に検討するためには、性別や年齢・教育歴などの属性変数を統制したデータによる比較研究も今後の重要な課題になるだろう。

(付記) 本研究の要旨は、包括システムによる日本ロールシャッハ学会第4回大会において、発表した。

註:

- ¹⁾ Lが高く、かつ、Rも少ないというプロトコルの場合、被検者の防衛的態度である可能性が高いであろう。しかし、このケースでも、その被検者の知的側面に関する検討も必要であろう。
- ²⁾ Lが高く、しかも、EAが低い値ではなく、収縮両向型にはならないプロトコルは、多くの場合、反応数が多いと思われる。
- ³⁾ Lと両向型やCDIの関係については、Lの高さが体験型を決定するのか、あるいは体験型がLの数値を規定するのかなど、因果関係の方向性も検討課題の1つであろう。しかし、Lの観点からも一説明が成立すると思われる。
- ⁴⁾ 解釈のストラテジーでは、 $L > .99$ という判別点が記されているが、Exner(1986)の著書には、

$L \geq 1.5$ という変数が表に記載されており、また、成人被検者では1.2よりも大きければ、Lが確かに高いという記述もある。むしろ、これらの基準が日本人被検者に適しているのかもしれない。

文 献

- Exner, J.E. (1986): The Rorschach: A comprehensive system. Volume 1: Basic foundations (2nd ed.). New York: Wiley. 高橋雅春・秋谷たつ子他監訳(1991): 現代ロールシャッハ・テスト体系(上・下). 金剛出版.
- Exner, J.E. (1990): A Rorschach workbook for the comprehensive system (3rd ed.). Asheville, NC: Rorschach Workshops. 小川俊樹監訳(1992): ロールシャッハ・テストワークブック. 金剛出版.
- Exner, J.E. (1991): The Rorschach: A comprehensive system. Volume 2: Interpretation (2nd ed.). New York: Wiley. 藤岡淳子・中村紀子・佐藤 豊・寺村堅志訳(1994): エクスナー法ロールシャッハ解釈の基礎. 岩崎学術出版社.
- Exner, J.E. (1993): The Rorschach: A comprehensive system. Volume 1: Basic foundations (3rd ed.). New York: Wiley.
- Exner, J.E. (1995): Introduction. Exner, J.E. (ed.). Issues and methods in Rorschach research Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc. p.1-24.
- 藤岡淳子・中村紀子・佐藤 豊・木村尚代(1995): エクスナー法によるロールシャッハ解釈の実際. 金剛出版.
- 小西宏幸(1996): 包括的システムにおけるロールシャッハ変数の相互関係. 関西心理学会第108回大会発表論文集, 40.
- McGuire, H. & Exner, J.E. (1995): Issues of probability and Rorschach research. Exner, J.E. (ed.). Issues and methods in Rorschach research Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc. p.159-179.
- 佐藤 豊・寺村堅志・中村紀子・藤岡淳子他(1998): 包括システムによるロールシャッハ・テストでの日本人一般成人の記述統計資料. 包括システムによる日本ロールシャッハ学会誌, 2, 1, 74-78.
- 高橋雅春・西尾博行(1994): 包括的システムによるロールシャッハ・テスト入門-基礎編. サイ

エンス社.

ムによるロールシャッフ解釈入門. 金剛出版.

高橋依子・西尾博行 (1996): 包括的ロールシャッフ・テストによる体験型. 心理臨床学研究, 14, 3, 335-342.

1998年8月31日 受稿

1998年11月5日 受理

高橋雅春・高橋依子・西尾博行 (1998): 包括システ